



第73回日米学生会議

新時代の胎動～絆と調和で築く未来～

2021年8月2日(月)～8月20日(金)

京都・青森・福島・東京

主催／一般財団法人国際教育振興会
企画・運営／第73回日米学生会議実行委員会
後援／外務省・文部科学省・一般社団法人日米協会・米国大使館
賛助(予定)／公益財団法人三菱UFJ国際財団・公益財団法人双日国際交流財団

目次

- 3 日米学生会議の理念**
- 4 実行委員長よりご挨拶**
- 5 第73回実行委員会**
- 6 日米学生会議の活動**
- 7 第73回開催地紹介**
- 8 分科会紹介**
- 10 参加者の声**
- 12 募集要項**

日米学生会議の理念



世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間にある。
その一翼を学生も担うべきである。

日米学生会議

1934年、4人の日本人学生が満州事変以降悪化していた日米関係を憂慮し、太平洋を渡り創設した日本初の国際的な学生交流プログラムです。創設時より学生自身の手による会議の企画、運営が行われ続け、太平洋戦争勃発に伴う会議中断をはじめ幾多の困難を乗り越えながら、現在まで、87年間の歴史を築いてきました。上記の理念の下、日米の学生たちは、約3週間に亘り様々な問題に対し議論を重ねながら、相互理解を深めます。学生も平和の実現に貢献すべきという創設時の理念が継承され現在に至っています。



宮澤喜一 氏

(第78代内閣総理大臣・1939、1940年参加者)

As one whose own first involvement in Japan-US relations was under the auspices of the Japan-America Student Conference in 1939, I can tell you honestly that it was one of my formative events of my lifetime. Having stood in your shoes more than fifty years ago, I sincerely hope that you will take full advantage of your participation in JASC.

ヘンリー・A・キッシンジャー氏

(元アメリカ合衆国国務長官・1951年参加者)

I had had little opportunity, in the post-war period, to meet and exchange views informally with Japanese people. The Japan-America Student Conference provided that opportunity, and from it came many valuable new perspectives on Japanese culture and society. It was also at that time that my interest was awakened in Japanese artistic and aesthetic traditions, and appreciation which remains with me to this day.



実行委員長よりご挨拶

現在、私たちが「日米」の「学生」による会議に参加する意義とは何か。日米学生会議が確かな理念のもと発足した1934年当時と比べ、日米関係そのものの性質と、国際情勢における役割が劇的に変化した今、改めてこの会議の向かうべき方向性が問われている。日本最初の国際学生交流プログラムとして長きに亘る伝統と名声を誇る一方で、それに甘んじることなく、日米両国に向けて、世界に向けて確かな貢献と発信をしていく必要がこの会議にはある。

第72回日米学生会議は、その意味で会議の開催そのものが歴史的意義のあるものであった。パンデミックの脅威により世界中で多くの国際交流団体の活動が頓挫していく中、先代が築いた強固な日米関係を反映する形で私たちの活動は確かに存続し、世界に向け新たな形での国際交流を提案し、成功を証明することができた。無論それに留まらず、日米両国の各地から選抜された参加者は、分科会での白熱した議論や、アクティビティを通じた日米安全保障・各種社会問題の再考により、己の内にあったこれまでの価値観を見直し、そして打ち壊す機会に恵まれた。

第73回日米学生会議が開催される2021年は、奇しくも日米講和から70年を迎えるとともに、米国同時多発テロからは20年、東日本大震災からは10年という節目を記録する。それぞれについて旧安保体制の構築、対テロ時・災害時での協力と、新たな二国間関係の形が世界に向けて発信されてきた。そして今、史上類を見ない世界的な危機を前にして否応なしに私たちは「新時代」を迎えることとなる。第73回のテーマは「新時代の胎動～絆と調和で築く未来～」である。他の参加者との本音の対話を通じて確かな「絆」を構築し、自らの手で調和ある両国の未来を築く、そうした強い気概を持った学生の参加と、第73回日米学生会議開催を望む。



日本側実行委員長 鈴木悠太
東京大学 教養学部 文科一類



米国側実行委員長
Nanase Hayami
Bowdoin College, Maine

We may all agree that 2020 has been a year of challenges for both the U.S. and Japan, as well as the entire international community. The coronavirus has exposed the vulnerabilities of the political and economic systems in both nations. Tensions between the U.S. and China also pose challenges to the U.S.-Japan alliance. Our theme, “Reflect, Reconnect, Rebuild: Standing Resilient and Rising Towards Bilateral Harmony” encompasses the role and the hope for the future leaders of the U.S. and Japan in a post-covid world. Rather than seeing the challenges as a burden, JASC 73 hopes to see them as the opportunity to grow and change for greater good. For the sake of achieving stability, prosperity, and peace in Asia and across the globe, it is crucial for the U.S. and Japan to further develop our relationship in order to resolve diplomatic and economic issues, protect national security, and cooperate on sciences and technologies. JASC 73 is an opportunity for students to reflect on the past as well as the present, reconnect with the greater world, and rebuild a stronger friendship between the U.S. and Japan that will lead to an alliance with constant cooperation and collaboration in a global context.

第73回日米学生会議実行委員会



反後 元太
東京大学 教養学部 教養学科



大東 千潤
上智大学 国際教養学部



小菅 優介
慶應義塾大学 法学部 政治学科



木村 理紗子
早稲田大学 国際教養学部



松本 章寛
群馬大学 医学部 医学科



須藤 直太郎
東海大学 工学部 航空宇宙学科



東 綺伽
東京外国語大学 国際社会学部

日米学生会議の活動

4・5月

分科会ミーティングSTART
春合宿
@オリンピックセンター
5/3~5/5

6月

防衛大学校研修
@防衛大学校(1泊2日)
6月中

7月

**自主研修
勉強会**

8月

本会議
@京都・青森・福島・東京
8/2~8/20
(8/1直前合宿)

春合宿

参加者は、4月からオンラインミーティングを行い、5月の2泊3日の春合宿にて初めて対面での顔合わせをします。当合宿では、日米学生会議の歴史を学ぶとともに、夏の本会議に向けて英語による議論やフィールドトリップを行い、日米学生会議の基礎を学びます。

防衛大学校研修

日本の将来の平和と安全を担う自衛官の幹部候補を養成することを目的とする防衛大学校を訪問します。日米関係を考える際、極めて重要となる「安全保障」についてより詳しく学ぶため、防衛大学校教授による特別講義を受ける他、同学校の学生と対話の機会を持ちます。

自主研修/勉強会 *任意参加

夏の本会議に向けて必要となる英語力の向上や、社会問題への理解を深めることを目的に、例年自主研修や勉強会を行なっています。第71回は有志の参加者で広島を訪問し平和学習に加え、地方創生や多様性などのテーマについて現場で直接見聞きし、考察しました。

本会議

第71回会議では、8月上旬にアメリカ側参加者が来日し、3週間にわたり高知、京都、岐阜、東京の4都府県をまわりました。参加者は分科会活動に加えて、下記の活動を経験しました。

- ・『レクチャー』…多種多様な分野の第一線で活躍する有識者の方々による講演
 - ・『文化体験』…現地の文化や伝統を実際に体験
 - ・『レセプション』…東京では外務省及び米国大使館、その他開催地では、県庁や市役所、大学や企業、地元の方々にご協力いただき、OBOGや社会人の方々を交えた懇親会
- その他、タレントショー、フィールドトリップなど様々なプログラムが充実しています。

*プログラム内容は一部変更の可能性があります。

第73回開催地紹介



京都

794年に平安京が日本の首都になってから明治天皇が東京に行幸するまで、1000年もの間日本の中心であった都市、京都。京都は三方を山に囲まれ、鴨川と桂川という2つの川が流れる風光明媚な地である。また、清水寺や上賀茂神社など14もの伝統的な建造物がUNESCOによって世界遺産に登録されている。長年文化の中心地として栄え、蓄積されてきた裏千家の茶道や能楽をはじめとする伝統を体験することができることから、日本有数の観光地としての立場を確立している。日本文化の礎の地として、文化行政の強化の地方創生の推進を目的とした文化庁の京都移転も決定している。コロナ禍で文化芸術が危機に瀕している現在、国における文化の存在意義と伝統継承について学んでいきたい。

青森

本州最北端に位置する青森は、北は津軽海峡、東西には太平洋と日本海に面しており、奥羽山脈が県内を二分しているため、地域によって気候が大きく異なる。農業や漁業など一次産業が盛んであり、世界自然遺産の白神山や奥入瀬溪流など悠久な自然を誇る。伝統文化であるねぶた祭は、国の重要無形民俗文化財に指定されており、日本の代表的な祭り文化とも言える。また日本の産業や市民生活に欠かせないエネルギー関連施設、安全保障の基盤となっている米軍基地があり、地元と密接な関わりを持つと共に、まさに日本・日米関係を根底から支えている。日米両国の将来を担う若者が、こうした施設と共存できる青森県の地方創生を学ぶと共に、国の根底となるエネルギーや安全保障などについて前提知識を身につけ、議論の糸口とする。



福島

日本で3番目に広い面積を誇り、西に奥羽山脈、東に太平洋を臨む福島。国内第4位の広さを誇る猪苗代湖や、あぶくま鍾乳洞などの神秘的な自然に加え、国宝の白水阿弥陀堂、江戸時代の宿場町の風情が残る大内宿、千年以上の歴史を持つ神事 相馬野馬追など、古代から脈々と続く歴史の息吹を感じられる文化的遺産も数多く存在する。一方で2011年の東日本大震災からの復興の営みは福島にとって大きな歴史的転換点となった。津波と原発事故による被害から一歩ずつ回復していくと同時に、県内各地でIT化やスマートシティ、ロボット研究、放射線研究などの分野においてイノベーションが現在進行形で次々と生まれているのである。本サイトでは福島固有の文化と自然に触れつつ、エネルギー政策や地域振興の分野での福島の先進的試みを体感し、真に持続可能な開発とは何かを考える。

東京

日本の首都、東京。政治・行政の中核を担う霞が関、大企業の本社や各種金融機関が集中する大手町や新宿を有するだけでなく、渋谷や原宿をはじめ、ポップカルチャーの発祥地としての役割も担う、世界有数の国際都市である。これからの日本を牽引していくであろうITやAI分野での先端を走る都市である一方で、浅草などでは江戸時代からの下町文化が色濃く残る、伝統ある都市でもある。オリンピック開催という歴史的な年を迎えることになる東京において、参加者には東京の世界におけるプレゼンスを実感するとともに、その伝統と潜在性を感じてほしい。そして、本会議の締めくくりを迎えることとなるこの地で、各分科会の議論や成果を社会に発信してもらいたい。



分科会紹介

事前準備

・ディスカッション：

参加者はそれぞれの興味に基づく分科会に所属し、議論をしていく中で知識を深めます。

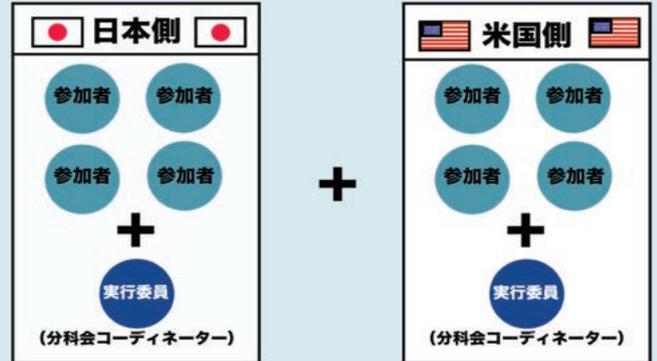
・フィールドトリップ：

分科会の研究テーマについての理解を深めるため、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO及び研究所などへ訪問研修を実施します。

本会議

日米学生会議が設立時から尊重してきた「本音の対話」の伝統は、日米の学生たちに日常で敬遠されがちな話題でも自由に議論する場を提供します。

分科会



・参加者8名所属：日米の参加者4名ずつ

・分科会のコーディネーター2名：日米実行委員1名ずつ



【自然災害における危機管理】

～緊急時のリーダーシップとコミュニケーションのあり方～

人類史において自然災害は私たちの生活を一変させてきた。当分科会では、各国の自然災害に対する対応の検証を通じ、危機管理にあたって政府や団体、個人がどのようにリーダーシップを発揮し、コミュニケーションを取っていくべきか考える。また、それらの行動の違いがそもそも国によるどのような違いから生まれているのかも検討していく。緊急時のリーダーシップとコミュニケーションは健康、環境、経済にどのような影響を与えるのか、またそれら3要素のバランスはどうあるべきなのか。コロナ禍を経験し、東日本大震災から10年が経過した現在、どのように過去の教訓を活かし未来に備えるのか、様々な視点から模索していきたい。

【教育とアイデンティティ】

～現代社会における個性の創造～

「教育」と聞いた時になにを思い浮かべるだろうか。教育は学校教育にとどまらず、家庭教育、社会人教育など、生涯に渡って続くものである。特に、思考が固まっていない若い学生のアイデンティティ形成に大きく影響を与え、その個性を創造する。例えば、歴史教育では同じ史実に対する認識が大きく異れば、その認識のもとに偏ったアイデンティティが形成されることがある。また、人々は住んでいる環境によって形成されるアイデンティティも大いに異なる。当分科会ではあらゆる教育の定義・意義を考え直した上で、教育がアイデンティティとどのように関わっているのか、また、将来の教育はどのように変わっていくのかを探っていく。

【サイバー空間と人間の安全保障】

～AI-データ技術新時代における社会変革と脅威～

現代はビッグデータの活用が進み、AIが囲碁の世界チャンピオンを破る時代である。5G、AIなど情報技術の指数関数的発達、知的生産のあり方までも変えつつある。一方で人間の安全保障とは、グローバルな脅威から人々の生活・生存を守る概念である。産業革命、IT革命以来のパラダイムシフトに人類が直面する現在、技術と規範の交差領域で生じる問題は枚挙にいとまがない。例としてビッグデータの中央集権化、多様なサイバー攻撃、災害対応でのAI活用が挙げられる。情報技術の発展と人権保護は両立できるのか。急速な情報技術発展の基盤となる法整備をいかに進めていくのか。国際社会、政府、企業、市民社会、個人はこの社会変革にどう寄与するのか。AI-データ技術新時代における人類社会の変化と必要となる施策について、議論と提言を試みる。

【哲学と個人の意思決定】

～文化、社会、宗教における信仰と道徳的価値～

私達は何か信念を持って行動することがある。宗教活動、学生運動や差別に対する抗議活動など例を挙げればきりがない。信念の対立ゆえに悲惨な争いが起こることもある。そもそもなぜ私達はその「何か」を信じるのだろうか。信念に基づいた我々個人の意思決定はどのように行われているのだろうか。我々の道徳的価値観に文化や周辺環境はどのように影響を与えているのだろうか。当分科会では宗教の影響力、合理性と信仰心、確実性と懐疑論、社会的慣習と変革、自由意志とは何か、など我々個人の意思決定に影響を及ぼしている事柄全てについて問い直すことでこれらの問の答えを見つけていく。近年のトピックとしてBLM運動などの社会活動の根底にある信念の構造、新型コロナウイルス感染拡大に対する人々の行動決定などについても考察していく。



【国際政治における日米の影響力】

～変化する21世紀の国際秩序～

日本とアメリカはGDPから見ても世界有数の経済大国であり、冷戦下では西側諸国の一員として国際秩序の形成に貢献してきた。しかし近年、中国が急速な経済発展を遂げて存在感を高め、自由民主主義への認識が見直されるなど、国際情勢の変化と共に日米の政治的影響力は変化している。日米は台頭する新興国とどう関わっていくべきなのか。各国の思惑が渦巻く現代の国際社会でどのようにプレゼンスを発揮するべきなのか。当分科会では、東アジアやヨーロッパといった世界各地、また各種国際機関などにも焦点を当て、安全保障、経済援助、移民・難民問題など、幅広く日米が国際政治に与える影響を議論する。そして、今後日米が果たすべき役割について考察する。



【メディアと社会正義】

～多様性と包括性の実現～

メディアは現代における多様性と包括性の実現に対して影響を及ぼしているだろうか。それとも人々の価値観がメディア上の言説を形成しているのだろうか。BLM運動を始め、人種や民族間の公正を求める運動が世界中で広がりを見せている。日本のメディアでも大きく取り上げられていたが結果的に、アクティビズムへの批判を助長するような報道の仕方もされていた。広告などを含め、メディアが発信するジェンダー表現は男女の役割の固定化等に関するネット上での「炎上」騒動との関連性も指摘されている。当分科会では様々なメディアで異なる解釈が飛び交う中でメディアはどのように多様な「個」を取り上げるべきかを議論する。また、社会正義(social justice)とメディアの関係性に着目しながら、今後目指すべき社会の形を模索する。

【科学技術と倫理】

～先端技術と次世代社会の共生～

ノーベル物理学賞を受賞し、マンハッタン計画にも関わっていたリチャード・ファインマン博士は、その著書で、「科学は天国の門も地獄の門も開ける鍵である」と述べている。近年の科学技術の発展は目覚ましく、我々の生活様式や国際関係に不可逆的な変化を引き起こした。しかし、原爆のような破壊的な武器を生んだ科学はその使い方を教えてはくれない。それを決めるのは技術ではなく倫理だからである。高度な専門化、細分化を経て作り出されたブラックボックス的な技術に埋もれ、我々は技術革新の先に何を求めるのかを見失ってはいないだろうか。科学はなぜ生まれ、なぜ必要とされるのか。この強力な”道具”を使いこなすにはどのような倫理観が求められるのか。当分科会では科学の原点に立ち返り、その発展、利用に携わる様々な視点からその役割を模索する。



参加者の声

コロナ下に行われた第72回日米学生会議は、正に变革と挑戦の回であった。春の防衛大学校研修延期、夏の本会議オンライン開催、そして秋以降の複数の公式行事は全てJASC史上初である。本会議では連日時差を越えて全員が現代社会の課題、安全保障の現実他、世界のより良い明日を拓く道を求め、互いの歴史観政治観の違いにもがきつつ熱い議論を重ねた。対面議論や寝食を共にできないもどかしさは多々あったが、事前の分科会打合せは柔軟に開けた感がある。

そもそも国際交流の意義とは、そこでの学びを礎にその後どう生きるかにこそあるだろう。世界というものは学べば学ぶほど己の無知無力に打ちのめされる。それでも先の見えぬ今ならばこそ深い歴史認識を培い、無知に無自覚であることを戒めて自己研鑽に努め、同じ志の仲間と出会うことを切に願う。

僕らが日頃当然と謳歌した平和も、一片の幸運と無数の血潮の上にこそ成り立っていると知れば、思い通ずる仲間の大切さは自ずと了解される筈だ。即ち、日米夫々の歴史と文化を背負った学生同士が世界平和を究極目的に本音で議論しあえたここは、かけがえのない気づきと鍛錬の場であった。



大井雄磨
慶應義塾大学 法学部



Michael Kleinlercher
State University of New York at Geneseo

Through JASC, I felt I was able to challenge myself in a rewarding and growth inducing experience. Despite the challenges associated with COVID-19, the execution of the conference was impressive, coordinating interesting activities and knowledgeable speakers. Pushing my limits intellectually and providing me insights on various topics such as media, culture, environmentalism, and other important subjects I was able to learn from and challenge the viewpoints of my American and Japanese peers. Through these discussions I felt I was able to forge long-lasting bonds with my fellow delegates. Those weeks spent learning and bonding with my peers have impacted how I view the world more than I could have imagined before applying to JASC.

多彩なバックグラウンドをもち、議論に積極的な日米両国の学生と交流できたこと——これが、日米学生会議を通して得られた、私にとっての最大の収穫である。研修や勉強会などにおける日本側参加者間での議論、本会議などにおける日米間での議論の双方で、皆と切磋琢磨し、自らの視野を広げられたと感じている。勉強会の企画・運営に進んで携わったことも、貴重な経験となった。私は海外経験がなく英語があまり流暢に話せないうえ、今回がオンライン開催だったことも影響したのか、米国側参加者との意思疎通にしばしば苦戦した。それでも周囲の参加者の支えのおかげで、最後まで地道にコミットできた。日米学生会議を通して両国の友人からたくさん刺激を受け、向上心が一段と強まったことは間違いない。皆との出会いに感謝し、今後に活かしていきたい。



太田智寧
早稲田大学 政治経済学部

【日本側参加者出身大学】

青山学院大学	お茶の水女子大学	大阪大学	関西外国語大学	学習院大学
京都外国語大学	京都大学	九州大学	群馬大学	慶應義塾大学
国際基督教大学	国際教養大学	上智大学	中央大学	筑波大学
東海大学	東京医科歯科大学	東京外国語大学	東京工業大学	東京大学
同志社大学	一橋大学	福岡教育大学	法政大学	北海道大学
防衛大学校	明治大学	武蔵野美術大学	立命館大学	早稲田大学 他

【過去の参加者】（敬称略）

87年の歴史を通じ、5000人以上のOBOGが各方面で活躍しています。

アレン・マイナー（サンブリッチ・グループ CEO）	橋本徹（みずほフィナンシャルグループ名誉顧問）
井伊雅子（一橋大学大学院国際・公共政策大学院教授）	広中和歌子（前参議院議員）
天野順一（元三井物産副社長）	船瀬俊介（環境問題評論家）
猪口邦子（参議院議員）	槇原稔（前三菱商事特別顧問）
今井義典（元NHK副会長）	三浦俊章（朝日新聞編集委員）
内古閑宏（ヴィネジョア社長）	茂木健一郎（脳科学者）
小林薫（産業能率大学名誉教授）	八木健（ベイビュー・アセット・マネジメント代表取締役）
竹村健一（評論家）	八城政基（元新生銀行取締役会長）
高橋和夫（放送大学名誉教授）	など

【日米学生会議同窓会ネットワーク】

日米学生会議には“Once a JASCer. Always a JASCer.”という言葉があり、過去の参加者（＝アラムナイ）同士の交流が継続的に行われています。会議参加者は以下のようなイベント等様々な行事を通して、非常に大きなアラムナイネットワークに加わることができます。

ようこそ先輩

例年、春合宿に最初の企画として過去の参加者と出会う、「ようこそ先輩」が開催されています。参加者28名は過去の参加者と多くの交流の機会を持ち、「学生同士の交流に留まらない」ことに特徴があります。

Salon de JASC

同窓会会員によって定期開催され、互いに交流する機会を持ちます。



第73回日米学生会議 募集要項

応募資格：	<p>①～③を全て満たすこと</p> <p>①2021年4月時点で原則として日本国内の大学、大学院、短期大学、専門学校等に在学する学生(正規留学生含む)であること</p> <p>②以下公式プログラムに参加可能であること*</p> <p>[春合宿] 5月3日(月)～5月5日(水) [防衛大学校研修] 6月中 [直前合宿] 8月1日(日)～8月2日(月) [本会議] 8月2日(月)～8月20日(金)</p> <p>③参加者発表後本会議までの期間、平均週一回の分科会でのオンライン会議に参加できること</p>
一次選考：	<p>【試験内容】書類選考(公式HPの応募フォームを記入)** 12月27日に公式HPリニューアルオープン予定</p> <p>【応募期間】2020年12月27日(日)～2021年2月7日(日) 23:59</p> <p>【選考料金】¥3,000</p>
二次選考：	<p>【試験内容】教養試験、個人面接(英語を含む)</p> <p>【オンライン選考】2021年3月1日(月)～3月5日(金)(予定)</p> <p>【場所】Zoom</p> <p>【選考開催協力】東海大学</p> <p>【選考料金】¥7,000</p>
合格発表：	<p>3月中旬(予定)</p>
会議詳細：	<p>[春合宿] 5月3日(月)～5月5日(水) [直前合宿] 8月1日(日)～8月2日(月) [本会議] 8月2日(月)～8月20日(金) [開催地] 京都府 / 青森県 / 福島県 / 東京都 [参加人数] 日本側学生 28名 米国側学生 28名 日本側・米国側実行委員 16名 [参加費] 18万円 (本会議中の移動費・宿泊費・食費等込み 春合宿、防衛大学校研修、直前合宿の食費、宿泊費は全て、交通費は一部込み。)</p>

* なお、公式プログラムに参加するために学校を欠席しなければならない参加者には、第73回日米学生会議主催者より「日米学生会議参加証明書」を発行する。また、公式プログラム参加に関する条件を満たすことが難しい際は状況を踏まえ対応するため、以下の選考担当メールアドレスに要連絡。

** 各種英語能力試験(英検、国連英検、TOEFL、TOEIC、IELTS)も参考資料の一部とし、他の選考項目と総合的に判断する。各種英語能力試験のスコア提出が原則必須。未受験者は、大学教授による推薦状と授業成績の提出等特別措置を行うため以下の選考担当メールアドレスに要連絡。

[日米学生会議事務局]

〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-2-2 深津ビル 401
一般財団法人国際教育振興会分室

☎03-3359-0563

jasc73.recruit@gmail.com (選考担当)

jasc.kouhou@gmail.com (広報担当)

[一般財団法人国際教育振興会]

〒160-0004 東京都新宿区四谷 1-6-2 コモレ四谷
グローバル スタディスクエア3階

☎03-3359-9621 info@nichibei.ac.jp

* 国際教育振興会は日米会話学院、日本語研修所の運営の他、外国人による日本語弁論大会、米国大学日本語研修プログラム等を実施しています。